

# 言語教育の先にあるもの

—— ころ豊かなるものを求めて ——

上野 めぐみ

教育とは、人間という豊かなる土壌に蒔かれた種々に注がれる太陽や水のようなものである必要がある。その種が芽を出し、豊かなる葉をたたえた枝となり、樹々として育ち、実をつけるまで、注ぎ続けられる存在でなければなるまい。力を貯えた心豊かな存在を育てるように時間をかけて行われるべきものに違いあるまい。

Maria Montessori は彼女の書〈Educazione per un mondo nuovo〉の中でこう記している。〈言葉とは神秘である。言葉は、ひとつの自発的想像として自然に現れ、驚くべきことには、その発達は一定の法則をたどり、ある時期にある高さに到達する。〉

神秘というあまりにも漠然としているが、この表現こそ言語を表すに相応しい言葉と言えよう。ここで原文を引用する。Il progresso raggiunto in pochi anni nella cura e nella educazione dei bambini è stato così rapido e sorprendente, che può collegarsi con un risveglio di coscienza, piuttosto che con l'evoluzione dei mezzi di vita....ma la personalità del bambino in se stesso si manifestò sotto nuovi aspetti, prendendo la più alta importanza Nessuno però poté prevedere che il bambino racchiudesse in se stesso un segreto di vita, capace di sollevare un velo sui misteri dell'anima umana, che in se portasse una incognita necessaria capace di offrire all'adulto la possibilità di risolvere i suoi problemi individuali e sociali. (Il segreto dell'infanzia)

— 幼児は生命の秘密を隠し持っている。それが、人間の心の秘密を解く鍵である。

幼児は我々に未知なるものを有し、大人が個人と社会の難題を解く手がかりをそこから引き出すことができる。— 幼児の生命の秘密を解く鍵は教育現場の鍵とも置き換えられよう。

我々に解けない難問を神秘としてしまうのは、あまりに都合が良いかもしれないが、その鍵を求めて試論を進める事にする。

## 言葉の形—現代におけるその意味：

言葉には外形と内形がある。音と意味。この二つの要素によって構成される言葉。比較言語学、構造言語学など、研究は、言語の音的側面などに向けられ進められてきた。言葉の意味の研究も始まり、言語の意義に関しても研究は進んできている。母国語においては、我々はほとんど特殊な環境にない限り、言葉の音と意味を、それらの言葉をめぐる経験を異にし習得する。

つまり、言葉とは、音的側面と結合した個々人の体験知識によって構成される〈個〉を表す存在である。幼児は、学んでいく。空にある白いフワフワした感じの物体を〈雲〉と。視覚的に幼児の目に映ったその時の〈雲〉の様を〈KUMO〉としてインプットしていく。母国語であれば日々の中、〈KUMO〉という言葉は幼児の中で様々な形や色を変え、その意味を個人的に確立、定着させていくわけであろう。勿論、基準が存在してそれぞれの言葉がその存在する国の文化社会構造をバックボーンに確立されていくのは至極当然のことである。自分以外の人間が使用する〈KUMO〉という言葉に遭遇するたびに自分の〈KUMO〉の意味を確認していく作業を無意識にしていく。〈KUMO〉という構音された言葉が〈雲〉ではなく、〈蜘蛛〉であることもまた知っていく。それらを使用しての言葉遊びをする。そうした発見は人間に言葉の持つ新しい側面を見せ、無意識的にもまた意識的にも、潜在する言語に対する習得力を増強させていく。それは、母国語に限った事ではない。言葉という大きな力と共に私達人間は育つ。言語によって社会性が育てられていく、と言っても過言ではなかろう。その言葉によって育まれる人間の言語習得の側面とその意義を教育という角度から考察していく。言語の社会運用。音韻と意味の整合のみで言語の社会的運用の条件は果たされないことは既に知られるところである。そこに、状況の共有という絶対条件が加わっていく。

さて、私は今、非常に興味を持って無意識に観察を続けてしまう現象がある。携帯電話に向かい、黙々とメールを打つ姿が目に入るとついつい見入っている自分に気がつく。中高生のみならず、小学生や大学生、社会人に至るまで携帯電話に向かい黙々とメールを打つ。その姿が珍しくなくなってから一体どの位の時間が経っているのだろう。メールは音的側面を有しながら読むという行為に至って初めてその側面が出てくる新しい意志伝達方法である。確かに至極便利である。言葉を交わしたい相手、連絡を取りたい対象が何処にしようと、何をしようかと、また何時であろうと、そのメールは相手に届くシステム。無条件に便利である事は間違いないのかもしれない。メールを受ける側も自分の都合によって、その通信を受ける事が可能なわけである。このような伝達手段が、現代、コミュニケーションの大きな要素となりつつある現実を否めないであろう。読むという行為によって意志伝達が図られていくのは、手紙など、その歴史は長い。ただ、言葉を交わす対象の存在が距離的に問われず、即座にさえも音声的側面を有す事がなくても意志伝達のできる現代。状況の共有は一部でなされても、ある一部においては欠落する。状況の共有の欠落によって生まれる意味の誤差や誤解は一方通行の状況の下、双方通行であれば容易に解決されるべき小さな問題さえも時に事件として報じられるような事態をも引き起こす可能性を秘めている。言葉の存在によって問題が引き起こされ、言葉の不在によって問題を複雑化させていく。古くも新しくも、ある言葉により引き起こされる社会問題は、言語習得過程や言語教育にその根を発していないか？ 人間の発達段階において言葉は、明らかに自分という〈内〉なる存在と自分を取り巻く人間を含めた環境〈外〉の関係性を明確化する道具の一つである。その道具を如何に手に入れていくか？ 前述のように、発せられる人間の表情や言葉の重要な要素である音的要素、高低大小のない文字による意志伝達の存在

するこの時代にあって、言葉によって育まれるべき人間の本質的要素と意義は、内なる言葉の具現化による個と他の認識と尊重、個と社会の相互作用による成長と言えよう。

どうしたら、私を認めてもらえるの？〈個の認識〉こそ、この人間社会において、いつの時代にあっても問われ続け、答えを見つけるべく討論を繰り返す永遠の問いと言えようか。多くの選択肢を持つこの現代にあっても、こんなに多くの分野において飛躍的な発達を見た2000年代にあっても、否、この時代だからこそ試行錯誤を繰り返しながらも絶対的な答えを得られない問い。人間としてこの世に生まれその生に喜び悩み、成長の中にあって問い続けること。それは、いかに自分自身を見つめ、認め、また自分以外の人間に自己の存在を認めてもらうかなのではないだろうか？ 私という人間が此処にいる、こんな事を感じこんな事を望んでいる。この私を見て欲しいというほんの一つの本能とも言うべき叫びから言動を起こしているのではなからうか？ 生を受け、心身両面においてのめざましい発達を自己の認識と環境の把握によって遂げてゆく。言葉の試用によって自己の内的現象を表し反復していくことで内的規律や外的規律（社会の規律など）を獲得していくのであろうか？ 言葉を試し用いる試用こそ、様々な成長を促す重要要素と思われる。自己を知る。他を知る。言語の発達は、人間が自分以外の人間と関わる環境にある限り、心的成長に大きく影響を及ぼし続けるわけである。

教育現場という社会の一角に身を置かせて頂いたことは、私個人にとって、人間存在の本質とその意味は絶えず極めて厳格な答えを求められてきた大きな問いであったように思う。教育とはその字の如く、教える育むこと。この時代の大きなうねりと流れの中に即した教育とは？ 言語教育の本質とは？ 言語によって、育まれるべきものとは？ と問われ続けてきたように思える。今回は、教えさせて頂く側にたってから突きつけられてきた大きな問題について、幼稚園児からシニアと呼ばれる人生の先輩に当たる年齢の方々に至るまで、英語という母国語以外の言語を介し接点を持たせて頂いて、新たに、言語教育のあり方、意義について再考する機会を得たように感じている。

今回は、〈言語教育の先にあるもの〉などという明らかに大きすぎた仮題によって自らが考え続けていた何かを探り当てる手がかりを得た。

この究極の難問は、悩み考えた末、自らの仮説によって、その姿を現し始め、まるで姿なき重い岩に追われる如く、必死で走る自分を映し出す結果となった事は、最初書き留めておかなくてはならないと思う。そして、今まで、漠としていた自分自身の輪郭がはっきりと浮き彫りにされ、真っ暗だった私自身の足元に、蠟燭が灯され、その小さな影を見せつけられたように感じている。光が灯された事でほんの少し見え始めてきた事について、言葉を使いこなし、自分以外に理解可能な表現ができるか否か、あるいは 実は自分自身以外の全ては周知の事実で、こんな事と一蹴、一笑される事かもしれない。では不安に思いながら、本題である教育、言語教育に携わらせて頂いてきた一個人の言語教育再考について書いていき始めようと思う。

## 教育現場における幼児への言語補助—具体例と共に—：自発性と発見による学習へのサポート～SLOW-LEARNING

教育—語源を紐解くと Paideia・Paideuein は Paidos 子どもという言葉をもとに動詞とした子どもを—するという意味〈子どもを良くしようとする働きかけ〉である。

〈良くする〉とは普遍的な基準があるかと言えば、否、時代、社会においてその形や意味合い、解釈を異にする。〈良くする〉とは〈善くする〉という人間の内的成長を助けていくのが本来の教育の原点と仮定する。他を善くするためには当然自らを善く保つ必然性が出てくる。つまり、教育環境の整備は必須であることは間違いあるまい。言語教育環境の整備に関して言えばどういった要素が要求されていくか考えていこう。何が自分にとって良いのか〈善いのか〉子ども自身に考えさせる。言葉の力を自分や自分以外の人間に投影してその意味を考えていく活動を言語活動に導入する。その導入方法として自分の言葉で、感じるままに自己表現をする、自分で書く作業、その書いたものを音声化していく作業、自分で自分自身が聞くために読む作業、人に聞いてもらう作業、自分以外の人間に自分について書いてもらう作業、書かれたものを読んでもらう作業—聞く、自分以外の人間が書いたものを自分で読んでみる作業—読む、他の人間の言っている事を書き留める作業—聞く+書く、自分の言っている事を書き取ってもらう作業—話す+読む、お互いに話した事、書いてある事、聞いた事について口頭で話し合う作業—双方向での聞く、話すという活動など、当たり前と言えば当たりの活動を丁寧に組み入れていく事をルーティン化させていく事で、言葉の持つ力を体感していく事になるのではないだろうか？

ここで、Slow-learning について具体例をもって書き進めることにする。Slow-learning とは、造語である。文字通り、ゆっくり学ぶ事をさす。ゆっくり読む、読んだ事について、ゆっくり考える時間を取る。ゆっくり話す、話した事について、もう一度考える。当たりの事であるが、コミュニケーションの手立てである言葉の本質的意義に則った学習法をもって、為されるべき存在であると思う。言葉によって行われる意志伝達が、使用する人間の心を豊かに育んでいかなければ、その意義は半減してしまう事となる。母国語教育とその目的を重ねられないのでは、やはり言語教育としては何らかの欠如がある事になるであろう。

さて、具体的には、どのような方法を見出せるだろうか？

幼児達は、自分の存在を素直にアピールできる存在である、しかしながら、その意志が時にレッスンを中断させる要素にもなり得る。Class management の重要性は言うまでもないが、SPEAKER が LISTENER に聞いてもらう工夫をしなくてはならないであろう。まずは、SPEAKING-STRATEGY を学ばせる機会を意図的に作っていく事から始める。それは、幼児においては、読み聞かせがそれを意味する事になると思われる。読み聞かせの有効性を今更ここで述べる必要もないであろうが、この読み聞かせによって、SPEAKER 側が、自らの言葉による表現力を見定め、その効果と意義を再確認する事となるのは言うまでもない。LIS-

TENER を育てるのは、SPEAKER であり、SPEAKER を育てるのもまた、LISTENER である事実に気づかされる。また、STORY-TELLING において言われる、優れた教材（この場合、絵本や本）の選考がその重要な一要素である事も明白である。創造的であり、また、理解、把握を容易にさせる内容である事は言うまでもないであろう。言葉によって集団の中の〈個〉、社会の中での〈個〉を認識させ、育てるとは一体どのような事であろうか？ そこで、幼児の言動で POSITIVE な要素に気がつく。PEER-LEARNING の天才であるという要素である。勿論、年齢に関係なく PEER-LEARNING は行われる。また、その効果も認められる。ただ、幼児の場合、自分が出きる事が嬉しいという事に目的を絞りきれぬために模倣をする事への抵抗は比較的低く、その有効性は実際、大きい。できた事で、得られる喜びによって、模倣による学びをどんどん実践していく。だからこそ、自分以外の存在の言葉を聞く態度を養成していく必要性から、受身に終始しない参加型の読み聞かせ等を意図的に組み入れながら、最終的には GOOD-LISTENER になるように育てていく事が、ひいては、言葉を聞き、自分の中に取り入れ、消化し、また、それら言葉を自分の言葉として出していく事ができるようになる事に繋がっていくわけである。

読む一聞く、という行為に焦点を当てながら、更には、その延長線上に話す一書くという要素に繋げていく。話を聞く行為から発見や探求を生み出していき、また、読む、話す、書く事から発見、探求を引き出す。言葉により生まれる副産物を豊かに持つ事も重要であるとすれば、SLOW-LEARNING、ゆっくりと進む学びの〈場〉を確保し、個々の発達の速度にできうる限りあった内容を導入する。目新しい事では全くないが、それらの再認識と実践を言語教育の現場で確認していく事が、最重要事項であろう。実際、総合的に言葉を学ぶ事を提案する The whole language, The global education の考えなど、多くの言語教育に提言される要素を取り入れた、学びの形を模索していく事になる。

知的好奇心の高い幼児達に内容の薄い教材を使用すると、その反応はとても興味深い。足がぶらぶらと振れ、眼はあちらこちら焦点が全く定まらず、果てには、隣の子と何かし始めたりするに至る。彼らの言語力に合わせようとして単純化した活動は飽きられ、活動全体が滞っていく。学習に必然性のない活動においても同じ事が言えよう。CLASS DESIGN の練られていない活動は当然回っていく事はないのである。

学習対象者の興味に合わせ、あるいは、興味を引き出す内容を核とし、言葉の選択を行い、言葉として使用する場を作る－英語のようにその活動外では使用しにくい状況にあっても思わず口に出てしまうような環境の整備をする。学びの場が生活全体に広がる言語教育環境の整備を可能な限り作っていくことも特に心がける要素であろう。文京学院附属幼稚園では、近年、保育者との TEAM-TEACHING が試みられてきた。自分自身が TEAM-TEACHING の中に入っている場合、その難しさに悩む事が多いが、唯一、明確にその効果を感じられる要素として挙げられるのは、英語活動の前後の保育者による英語に対する動機づけの要素である。また、英語活動の核ともなっている歌についても、保育者のピアノの演奏速度などを学習者の条

件に合わせたものにする等、英語教師の使用するCD等の音源に勝る環境作りが可能となる。TEAM-TEACHINGの持つ可能性には大いに期待できる要素が存在するように感じる。また、保育内容との連動によって生まれるものにも言語活動の本質が問われているように思う。

さて、言語教育環境について触れる前に、まずは、パンゲアというNPO法人が始めた絵文字について少し考える事にしよう。冒頭にも触れたが、携帯電話に内蔵されている絵文字を目にした事はあるだろうか？ また、小学生、中高生の特に女の子達が手紙に使用する絵文字を目にした事はあるだろうか？

文字の起源を思い起こせば実際、絵文字がいかに有用であるかは、明らかである。文字が十二分に発達し、象徴する絵自身の必要性がなくなっても、何らかの形で絵文字は存在してきた。パンゲアを主宰する森由美子女氏はインタビューの中で、こうコメントされていた。9.11のテロによって絵文字の必要性和普及を考えた。文化、宗教、習慣の違いを何かによって埋められないのか？ 現在、550もの絵文字を多摩美術大学の生徒達と力を合わせ考え出し、絵文字への反応の違いを探り、世界での実用に耐える絵文字を確立するためケニア・ナイロビの子ども達の絵文字に対するデータを取り、試行錯誤を続けている。文化、生活習慣その他諸々の要素によって、出てくる絵文字への理解の違いなど、森女史は、まだまだ始まったばかりとインタビューを終わられた。

言語教育の扉が言語そのものの存在意義等によって開かれる事は間違いないであろうが、地球規模、宇宙規模で言語の持つ意義等を問う事など至難の業ではあろう。ただ、言語の種類とその数を知る時、私達日本人がそれぞれの一生涯に接点を持つ事のできる範囲の言語にフォーカスしながらも、言語がこの世界に一つであったならばと願わない人間はいるまい。

それほど、言葉は我々人間生活の大部分を操るような大きな要素を占めている。

### 共有と非共有

聖書創世記によって示された言葉の存在。第11章全地は同じ発音、同じ言葉であった、と。だが、現実には、世界におけるその言語数と存在は研究者によっても漠たる実態である。言葉は、気候、風土、民族、文化、習慣など様々な要素によって形成されてきた。共通項、絶対的要素と、その反面的要素も同時に兼ね備えた存在である。〈個〉の体験によって意味合いを変える存在でもある。神経心理学・失語症の研究者である山鳥重氏は、〈言葉は心を組織する。言葉は自分と世界を関係させ、その関係を理解する手立てとなる。言葉は心が生成する表象や、非表象性の変化（感情など）に名前を与える事によって心を分類し整理する。言葉はそもそも心を記号化する働きでありながら、出来上がった記号が今度は心そのものをその記号に従わせるのである。こうして言葉は心を組織する重要な手段となる。〉と言葉を表している。言葉の共有で社会を作り、心を共有し、共有の文化を作り上げてきたとする氏の言葉を借りて言うならば、人間はこの外的存在である肉体と内的存在とも言える心の記号でもある言葉によって形成されている事になる。無論、心が言葉で全て表せるわけもなく、自分自身の中で渦巻く全てを表現

できたらどんなに誤解や不安や、諸処の問題を起こさずに済むであろうか。それほど、人間自身の存在さえも複雑なるものである。その、極論すれば、心を形成する大きな要素となる言葉の獲得、第一言語習得、母国語習得とその習得形態を異にする第二言語習得、外国語習得の分野に足を踏み入れた時、習得と共に形成される人間の内的変化に大きく興味を持つ人間も少なくないように感じる。言語習得によって得られる人間の内的変化に焦点を定める事によって垣間見られる人間と言葉の関係性。言葉によって育まれる自我、自己と他。母国語習得と外国語習得の関係性など興味は尽きないが、今回は概論として、大まかに人間形成と言語教育について試論を続けよう。現実、島国日本、単一に近い民族、単一ではないが時代の移り変わりによってほぼ一言語と言える言語など、なかなか、日本語以外の言語の習得に困難を極める現状の中、近年、様々な試みが為されてきた。小学校への英語の導入とそれに関連した多くの試み。英語という言語教育に関わる人間の努力。全て、時間、労力をかけ試行錯誤を続ける人間の総力に何か加わる事で、もう一つ母国語以外の言語習得が生まれるべき条件が整うように感じている人間が多いように思える。もう一步の何か。私自身もそのもう一つの条件探しに足を踏み入れ現在に至ったと感じている。言語教育者一人一人が総力をもって取り組んでいく方向性についての仮説として出会ったのが、これから書き進めていく私自身の核となっている教育論である。

私自身、冒頭に記したマリア・モンテッソーリ女史の教育論に非常に興味を持ってきた。また、ルドルフ・シュタイナー氏の教育論には、何か感じるものがある。教育の基礎としての一般人間学の第八講・第九講で彼が説いた自我感覚、思考感覚、聴覚、言語感覚は彼に言うところの認識感覚に着目する時、子どもに与えるべき概念が生き続ける概念でなくてはならないと説かれている〈p.145, 118〉。何故、現代にモンテッソーリやシュタイナーなのか？ 多分、私自身の中で何か教育の原点を手探りで求めている中で、子どもと向き合う際、教育の意味や形が、決して型ではなく、柔軟性を有した有形でいながら形を決定できない鑄型として存在する事を、実感したからであろうと思う。教育哲学の本をこの何十年と求めて読んできたのは、絶えず、自分自身の教育観を問いただしながら現場に立って行きなさいという恩師の言葉が頭の何処かで必ず響いていたからであろう。多分、人間全てがそういった類の問いの中で生きているわけで、今更特筆すべき事ではないかもしれない。だが、私には、正解のない問題を絶えず突きつけられているようなものであった。

小学生の時、〈学問に境などない、生活の中には、数学や国語、理科などが個別に存在しているのはごくわずか。他は、全ての要素が混在し全て一つ一つのそれぞれの答え探しを総合的にしていくものだから。〉との趣旨の文章を読んだ。何故、では皆分けて勉強するの？ というのが当時の私の大きな疑問であった。その問いに、母は〈それは全部の分野を一人の人間が極める事はほとんど不可能だから、それぞれの専門家を見つけ確保するために分けておく、好きだったり、得意だったりする方向を見つけるために分けておく。つまり、一人一人の人間の存在探しの第一歩のためにそうしてある。〉という答えを私に与えた。つい先日、小学校英語

は、自分探しの手立てとなるもの、との文章に出会った。妙に、自分の疑問と合致していて不思議な感覚を持った覚えがある。

今思えば、ある年齢に至ったら、当然ある程度〈得意不得意〉があって当たり前という両親の教育観に私自身かなりフォローされてきたかもしれない。言葉とそれをまるで魔法のように使える人間に非常に興味を抱き、それはいつしか、私達が生活圏として身を置く事のない母国語以外の言語を使える人間への興味に移行していった。日本語以外の言葉は自分自身を創造的にする、と感じたからであろうか？

言語獲得の謎、それは、母国語に始まり、母国語以外の諸言語習得にも及ぶ。日本人が国語を学問としての日本語として学び始める時、それは、記憶を伴った理解、分析、文法解析など専門性を帯び、学問的人口は減少しながら、その密度は高くなる。他の分野においても当然同じ事が言えよう。最高教育機関においてかなり深くある分野を専攻した人間でさえ、社会人としてその専門性を問われるような職業につけるとは限らない事も周知の事実である。英語という言語のある分野を研究できるポジションにあっても時代と個人としての資質と環境によって思わぬ方向性へと向かって歩む事になる事も可能性としては低くはない。

先ほど紹介した絵文字についても、現代の世界状況が生み出した至極、必然性を帯びたコミュニケーションスキルとなっていくかもしれない。日本人が母国語以外の言語を習得する必然性はどこにあるのか？ 中高生が、学期毎のテストや大学や専門学校など自分の将来を考えた時に必然的に絶対要素となる受験等の必要性のためにその言語に取り組む時、言語としてのメリットやロスはその人間にどう影響力を持っているのか？ 何が無駄で何が有用なのかを問うのではなく、言語に取り組む一個人にその言語が如何なる意味を持っていくのかを熟考する時間が物心ついた時期からあまりにも皆無に等しくはないのか？ 日本人一人一人の個人の必要に応じた教育観があまりにも欠落しつつあるように感じている。

幼児のように生活の中で行われる言語教育が存在すべきであろう。言葉を生きたものとして試用していくカリキュラム、試し使いのできる教育環境として、多くの自分以外の人間が使用する言葉に触れる。つまり、他の人間が記した文字に触れる事、聞く事、読む事など、習いの原点とも言える、多聴、多読を効率よくカリキュラム化する事に戻るべきであるというのが結局のところの解決法のようなのである。ここで、大きな問題となってくるのが時間の余裕であろう。自らの時間を有効利用しようとする心を育む。プレジャーラーニングなどあるわけがないと言われるところだが、幼児期に喜びをもって学ぶ教育環境にある時、私はそれらは大きな可能性の中に育まれていくと信じている。心的発達の中の言葉の存在は、その人間を囲む大きな教育環境と言えるのではないか？

心理学や、発達心理学において言語の獲得は人格形成と如何なる関係にあるかについて言及している。言語は構音によってやりとりされる双方通行の伝達手段である。言葉の胎生期、生後1年前後は言葉の土壌が形成される時期を経て言語習得期間に入る事になる。その時期以前、つまり、誕生以前、胎教としてもどんどん言葉かけしなさいと言う。その真偽を今ここで問う



つもりはないが、誕生以後の言葉かけについては非常に有効であるように感じる。はっきりしたデータは現在持っていないが赤ちゃん学、赤ちゃん学会なるものが存在する現代、徐々に、解明されていくに違いない。私自身の体験によってもその有効性をとても強く思うこの頃である。

### 幼稚園における言語教育〈英語〉

文京学院大学付属幼稚園における保育一保育の中での英語の時間の持つ役割を考える。

幼稚園の英語を保育の先生方と共に試行錯誤され現在の幼稚園の英語の礎を築かれた外国語学部教授アレン玉井光江女史は、昨年までの幼稚園での英語活動の中でこのような事を言われていたと記憶している。〈子ども達に英語という言語を通し、生きていくための力になるような英語教育を心がけ、扱っていくトピックを自分の中で暖め、練り上げて形にしていく。それには本当に時間をかけ、また悩んできた。〉と。自ら英語教育のために最大限に時間も労力も存分にかけ続けてきた方の言葉に強い力を感じ、また自ら選ぼうとしている道への責務に悩み続けた。保育は週に一度の午前保育を除き9:30から1:30。年長クラスはその中の週一度20分を年35回程度。年中クラスは15分をほぼ同数。年少クラスは夏休み以後成長に合わせ、一回10分を月一度を目安に8回英語活動に当てている。保育の時間内に組み込まれた英語活動の内容も保育に即した内容に努め、また子ども達の知的発達や興味に即してカリキュラムを仮に作成し、活動に生かす指針として保育者の協力の下、実際の活動を行ってきた。学年つきの先生や担任の保育者が英語教師と共に子ども達の前に立っていく形を提案されTEAM-TEACHINGの形に定着させてきた指導者も前出のアレン教授である。英語活動自体を取り出し保育の形ではなく、通常の保育の中に馴染ませていく、特別ではない普段着の言葉の活動の一端として英語を導入させていくというねらいは、数年間の同女史の努力と保育者との協力によって、一つの園での教育環境になってきたように感じているのは私だけであろうか？ 今回、保育者の協力を得、生の声として言語教育観を伺う事ができた。保育者には名前以外、学歴・年齢などの個人情報に関してはアンケート形式で答えてもらえた。また、同幼稚園以外の保育者の言語教育観を参考までに協力頂ける事になった。知人を頼り、私的な意見だがと、幼稚園の先生方の意見を頂く事ができた。言語教育観等という漠然たる質問に嫌がる事なく自らの意見を書いてくださった先生方にこの場を借りて御礼を申し上げたいと思う。

保育者が子ども達と接する際に、心がける事。それは、しっかりと子ども達が話したいと思っている事を聞いてあげる事。話の腰を折る事なく、しかしながら必要に応じて、サポートしてあげられるよう余裕を持ちたいと思っている事など。まずは、頷いてあげる事。ゆっくり丁寧に言葉を略する事なく言葉を返してあげる事など。

MOTHERESE FATHERESE. PARENTESE. CARE TAKER TALK の特徴にほぼ等しい具体的な事例があがってきた。具体例をアンケートに書かれたままの表現で引用する。

〈言葉こそ大切な信号だから、その言葉の発する状況、身振り手振りを見逃さないように心

がける。〉

〈言葉を足していくのは簡単だけれど足さずにその子どもの言葉から何かを拾えるように心がけていきたい。〉

〈言葉のサインを見逃さない。(子どもはまだまだ言葉を操れないので、言葉の裏側に隠れているものに気がつけるようになりたい。) =言葉とは反対のサインを見落とさないように心ずる。〉

〈言葉が私達にとって一つの大切な存在である事を理解できるような言葉を自分が使っていないかなくてはと思っている。(実際はなかなかそうはいかないが。〉

〈子どもと実際接するようになってから言葉に対する認識が変わったかもしれない。いいかげんに使っていた自分にちょっとヒヤとする事もある。〉

〈自分の言語観ではないが、同僚や先輩達の子どもへの言葉かけを真似していく事で少しずつ学んでいる事もある。〉

〈自分自身、語彙のなさを実感して嫌だと思う。あの・これ・それと曖昧な指示語を使っている自分に驚いた事があるので、それは止めたいと思っている。〉

〈余裕がないので、言葉に特に注意はしていない。〉

〈特にそんな事を考えては保育した事はない。〉 など様々な意見を頂くことになった。

アンケートに答えてくださった方の年齢は20歳から55歳。在職年数は1年未満から31年と様々である。

年齢とアンケート内容についての興味ある相関関係を見出す事はできないが、個人的に心に残ったものがある。

〈上手く書けないけれど、自分の子どもを育てるように、大切に、でも厳しく言葉が生き物である事を感じさせてあげたい。言葉によって喜びを感じたり傷ついたりする事を教えてあげたい。自分の言葉で話せる人間にさせてあげるお手伝いができればいいと思う。〉 在職年数は6年。言葉の重要性を年を追う毎に感じていると言う。先輩の保育者が続ける読み聞かせ活動に子ども達の成長を感じ、何故子ども達が仕掛けも何もない単純な本にのめり込んでいくのか素朴な疑問を持った事に始まったという。以来、自分自身のライフワークとして言葉の持つ魔力の詰まった読み聞かせを通して子ども達と接する時間を持っていきたいと思ってきたとある。

私自身、幼稚園の英語活動に組み入れてきた絵本。一方通行にならないために参加型の活動にする、未知なる言葉の導入の工夫、子ども達の年齢や興味に合致しているか否かで反応は明らかなる結果を示す事になる。言葉の持つ力を自ら感じる者の一人である。英語圏に限らず、どの言語圏においても興味を持って本屋に飛び込むのだから、自分が面白いと思う本、購入したいと思う本の要素の大部分が視覚的なものに左右されている事に確信を持った。特に構図、色彩など。言葉を追う時間的余裕がない場合はかなり視覚的なものに影響を受けている。子ども達はどうか？ 読み聞かせの場合、勿論、挿絵の持つインパクトで導入部分はかなり影響があるであろう事は間違いないが、集中できる環境においては、言葉の力をどうしても感じざるをえ

ない。では、言葉の力とは一体何か？ 声色や音の強弱も重要であろうし、また話の展開もその大きな要素であろう。しかしながら、子ども達の様子を窺うとあることに気づくのである。それは、子ども達の聞いている姿勢の変化である。個々人によって当然違う。前のめりになったり、前に進み出る子、引く子、横の友達に接近する子、離れる子。共通している事は本から視線が離れない事である。静かに聞き耳を立てている様である。自らの頭の中に今耳に入ってしまったお話の世界ができている。想像の世界に自らを招き入れて次の瞬間を待つ一人一人の子ども達の姿がそこにある。言葉の力は実体験を自らにさせる事のできる力なのである。大人にとっては勿論、幼稚園児にとっても言葉は自らを表現できる最高の技術の一つであり、道具の一つである。幼児期の成長において言語の発達が促す影響力は大いなるものである。

内的活動が、外的活動として自分以外の人間に示され、調整を図り、規律を促していく。言わば、言葉によって自分という個を認識し、その言葉による反応に、また、自分以外の人間の存在を意識し始める糸口を掴んでいく。まるで、独り言のように同じ言葉を繰り返しながら、彼らは手探りで自己認識をし、他者の中での個を確立していく。まだ、意志伝達としては、十分に機能しない一方通行の伝達は、次第に言葉によって双方通行の形態を取れていくようになる。言葉によるコミュニケーションの原型を体感していく事で、言葉の持つ潜在能力を自ら習得しつつ、社会的規則などをも習得する事となる。

10ヶ月から15ヶ月で意味のある単語が使える、16ヶ月から18ヶ月齢で一単語を使う幼児における実験によれば文法の獲得は文法の実際の使用に先立って起こるとある(酒井邦嘉著言語の脳科学 p.286-P・Tallar, Et Al, LANGUAGE COMPREHENSION IN LANGUAGE-LAERNING IMPAIRED CHILDREN IMPROVED WITH ACOUSTICALLY BY TRAINING, SCIENCE, 271, 77-81)。言語獲得、文法獲得の観点から考えると社会性などの獲得と平行し言語による人格形成がなされてくるのであろう。自らが使用する言葉によって自らが出来上がる。これこそ、神秘の言葉がびったりである。

学生と言語学習：入学する年と卒業する年。2年間の言語学習で得られるもの—それは、個々人の有していた能力と努力でその経過と結果を異にする。ただ、ここ数年編入や留学を試みその希望を果たした学生達と話をする機会を得ている。彼女らは短大での今思えばまだまだ専門的というには程遠い英語学習を振り返って、短大で得た自分なりの言語学習への試行錯誤の意味をきちんと位置付けしている。英語という一言語の玄関先をノックしただけに過ぎなかったが、今になって、大学や留学先に到達して、中高生で荷作りしておいた荷物をやっと解くことができた感じなのだと言う。非常に面白い表現ではないか？ また、本当に実感のこもった言葉ではないか？

これこそ、学びの場が発展的に作られた例であり、学生生活以後の人間の生涯にわたる〈学び〉の位置付けが成功していると言えないだろうか？ 家庭人や社会人として一通りの役割を果たした方々の言語学習についても、蛇足ながら加えておく事にしよう。今年3年目の英会話のグループの例を挙げることにしよう。年齢層は50代から70代のグループで、区の国際交流機

関が主宰した英会話クラブが原型である。女性男性の比率は6対4。最初は80歳代の参加者もいらした。国際結婚をしている娘と孫のため、老化防止のため、永年の夢のためなど、その言語学習を始める動機は様々である。週に2時間。学習環境の整備された教室で活動を行い、欠席率の非常に低いクラスと言えよう。レベルはまちまちであるが、特筆すべき事は、ルーティン化された歌とはいえ、2ヶ月に1曲の割合で英語の歌を歌える事であろう。活動は、時間的にも当然制限があるため、ほとんど音読程度、歌は耳にする頻度の高いもの、メロディーはある程度シンプルなもの、限定される要素は多い。だが、この活動こそが継続を促す大きな要素であるとの意見である。また、英語による手芸、料理など英語を道具としてもう一つの活動を行っている事も大きいと言われる。

英語という言語によって何かを行う。幼児にも大人の言語活動にも楽しみの要素を組み込んでいく。学習年数や年齢、動機、知的発達等に合致したカリキュラムや教授法、教材は勿論重要である。しかしながら、教育環境の整備、つまり、本当にその言語に向き合う事のできる一環境。特に、言語学習の初期において学習者に与えられる適切な言語補助は、教える側の資質や哲学に頼るところが大きいであろう。生活の中に言語があるのは至極当然な事である。言語学習の理想は、やはり、生活の中で生まれる必要と無駄の中で育まれていく事であろう。昨今、関心を寄せられる脳科学についての研究がかなりの速度をもって進められている。様々な事柄が解析され各分野に活かされようとしている。幼児教育こそ〈脳力〉と幼児脳教育こそ人間形成にとって最重要、人類全体の未来にとっての課題と言われる。Intelligence quotient, Emotional quotient, Prefrontal quotient、澤口俊之氏が彼の著書〈幼児教育と脳〉の中で自我(人格)と関わる前頭連合野(prefrontal association cortex)という脳領域の知性の重要性を述べている〈p.11, 14〉。

認知脳科学は人間の知性を8知性と1超知性〈自我〉と分類し〈p.17, 18〉ガードナーは多重性と呼び、オースタインは多重精神説、フォーダーは心のモジュール性〈機能単子形式〉と呼んでいる。幼児が言葉を認識し、試用によって言葉の体験をする。言葉は自分や自分以外の人間によって知覚され、理解され、記憶され、また、使用と試用を繰り返す。

複数の知性の並列によって成り立つ知性は幼児期に可塑的变化を遂げ、遺伝と環境要因によって変容可能。であるならば、複数の知性をバランスよく育てる。言語的知性、絵画的知性、空間的知性、論理数学的知性、音楽的知性、身体運動的知性、社会的知性、感情的知性、そして、全ての知性のコントロールをする超知性。能力開発に必要不可欠である自発性を育むための、あるいは好奇心を持ち興味を持って対象物に向き合う教育環境と内容が求められる。達成感、満足感という要素も見逃せまい。

さて、では実際どういった言語教育を、カリキュラム編成をという事になろうか？

これは、学習者の実態に合わせていくしかないであろう。学習者の興味を日常的に把握している協力者がいれば理想的であるし、また、自らが、ある一定の時間と空間を学習者と共にし学習者からの直接の情報を得る事である。学習者数が多い場合は、情報収集を多岐に求めれば

良いであろう。学習者の身体の各能力を引き出す活動をコンパクトに行う。アテンションスペースの短い学習者には次回の活動までに個々人で自発的にできる活動を共通スペースに常設するなど、好奇心、興味を活動時以外に持てるような環境作りをしていく事かもしれない。言語による〈発見のある日常づくり〉。簡単に言ってしまうと、こんな試みを今後はしていきたいと思っている。

**参考文献：**

- Il bambino in famiglia, Maria Montessori, Edizioni Garzanti.MI 1991  
Il segreto dell' infanzia, Maria Montessori, Edizioni Garzanti.MI 1992  
Come educare il potenziale umano, Maria Montessori, Edizioni Garzanti.MI 1992  
La mente del bambino, Montessori, Edizioni Garzanti.MI 1992  
Educazione per un mondo nuovo, Montessori, Edizioni Garzanti.MI 1992  
モンテッソーリの教育；マリア・モンテッソーリ，吉本二郎・林信二郎訳 あすなろ書房 1970  
モンテッソーリの教育法；マリア・モンテッソーリ，クラウス・ルメール・江島正子共訳 エンデルレ書店 1983  
ことばと文化；鈴木孝夫 岩波新書 1993  
伸びてゆく子どもたち；詫摩武俊 中公新書 1998  
こどもと学校；河合隼雄 岩波新書 1996  
ことばと発達；岡本夏木 岩波新書 1996  
こどもとことば；岡本夏木 岩波新書 2001  
言語の脳科学；酒井邦嘉 中公新書 2002  
幼児教育と脳；澤口俊之 文芸春秋 2002  
ヒトはなぜことばを使えるか；山鳥重 講談社 現代新書 1998  
英語幻想；金森強 アルク 2004  
脳のしくみが解れば英語は自然にできるようになる；大島清 ベストセラーズ 2001  
ルドルフ・シュタイナー教育講座；高橋巖訳 筑摩書房 1989  
旧約聖書